

武田真優

廃校の利活用から考える「学校」の存在意義

要旨

本研究は、廃校事例をヒアリング、アンケート、現地調査を用いて分析することで、学校という存在が地域とのつながりを失わないための手段として持つ意義を明らかにするものである。

現代の日本において、深刻化が進む少子高齢化の影響が目に見えて現れている事例が、統廃合件数の増加である。2004年から2023年の20年間に日本国内で発生した廃校の延べ数は8850校に達しており、人口規模にかかわらず全ての都道府県で廃校は発生しているという現状がある。廃校校舎の活用は、国や地方公共団体による取り組みにより簡略化が進んでいるものの、市町村ごとに廃校活用までの課題は異なっていることから、地域住民、行政、活用者の3者すべての協力が必要不可欠であることが考えられる。

調査の分析により、統廃合を経験している人にとって、失われてしまうことを経験しているからこそ学校への「愛着」を感じやすくなっており、当時の思い出の希少価値とそこで育まれた密度の濃い人間関係によってさらに母校への思いが高まっていることが確認された。また、「もともとの学校をいかに継承するか」といった、かつての学校としての存在を無視することなく地域を大切にした活用が行われていることで、地域住民に廃校活用が受け入れられるものであると考えられる。

この結果から、廃校校舎を活用することは地域とのつながりを失わないための手段として意義を持っていると結論付けた。学校は地域のシンボリック的存在であり、それは閉校後も地域の中心に位置することには変わりがないことから、校舎を活用することで新たに思い出を紡ぎ、交流できる地域の拠点として生まれ変わることができるためであると考えられる。